

若冲と壬生菜

伊藤若冲（正徳6年(1716)～寛政12年(1800)）は、江戸時代中期に活躍した京都の絵師です。今年は若冲の生誕300年の記念の年にあたることから、京都では、あちらこちらの美術館や博物館で、若冲の展覧会が開催される等、記念のイベントが目白押しです。若冲の生家が、錦市場の青物問屋であったことから、錦市場では、お店のシャッターが若冲の作品で彩られています。

さて、画家としての若冲は、当時の京都の文化人名録である『[平安人物誌](#)』でも上位に掲載されており、実力も人気もある絵師であったようです。宝暦5年(1755)に青物問屋の家督を弟に譲って隠居した後は、専ら絵を描いて過ごしたというのが定説でした。しかし近年の研究により、隠居後も町年寄として町政に携わっていたことがわかりました。

明和8年(1771)に錦小路高倉付近の路上で開かれていた青物市場に対して五条問屋町の青物問屋が市場の開場の差し止めを求めて東町奉行所に出訴するという事件が発生した際には、錦の青物市場に出荷している近郊の村々にも呼びかけて東町奉行所と掛け合う等、中心となって奔走しました。若冲の奮闘のおかげで、3年後の安永3年(1774)に、錦の青物市場が再開されたそうです。京都大学文学部には、この事件の顛末を記した『[京都錦小路青物市場記録](#)』という資料が所蔵されていて、末尾には「錦小路通高倉東南角、寛永年より市始ル、市元祖之八代目柵屋源左衛門」と記されていますが、この柵屋源左衛門こそが若冲の本名で、この資料から奇想の画家、若冲の意外な一面が明らかになりました。

ところで、錦市場に青物を出荷し、五条問屋町との争いの際にも協力した村に、壬生村がありました。壬生は伝統的京野菜のひとつ、壬生菜の発祥の地ですが、『[拾遺都名所図会](#)』という江戸時代中期の京都のガイドブックには、壬生菜の収穫の様子が描かれています。



土手に積み上げた壬生菜を川で洗う人や天秤棒で担いで運ぶ人が描かれ「洛西壬生の壬生菜は美味であり、茎の筋が細く株が小さい」とあります。よく見ると、株は小さいどころか、現代の壬生菜と比べるとかなり大きいようです。「土がついたままで、桐箱などに詰めて遠くへ送り、二十日、三十日ぐらい経ってもまた水をかければ元のように青味が戻る」とも記されていて、壬生菜の消費地は遠方まで広がっていたことがわかります。

川に入っている人は、足桶という桶に足を入れていますが、この足桶は、防寒具として寒い季節に用いられたものです。壬生菜は、寒い冬が旬です。まもなく、壬生菜がおいしい季節が到来します。若冲や京野菜の伝統に思いをはせながら、旬の壬生菜を味わっていただきたいものです。

〈参考文献〉

『[若冲ワンダーランド](#)』 MIHO MUSEUM 2009年

宇佐美英機「近世後期の京都錦高倉青物市場の動向」(『東北
学院大学経済学論集』177号 2011年 83-98p)

(2016年11月2日公開)